

が大きな割合を占め、「病床管理」や「働き方改革」をテーマにする演題が増えてきている。こうした分野への現場の関心の高さがうかがえる。」と指摘されました。続いて会長講演として三木が「病院は今、大再編時代を迎えている。病院や福祉施設が質の高い医療と介護を提供するためには、情報の管理と分析、そしてデータを有効活用して、健全な病院経営を実践することが求められる」と述べさせていただきました。

特別企画では公益財団法人がん研究会がんプレシジョン医療研究センター所長、内閣府戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)AIホスピタルプロジェクトディレクターの中村祐輔先生に「内閣府AIホスピタルプロジェクト」と題して、ライブ配信というかたちでご講演いただきました。本学術総会の延期開催に伴って、他の学会と重なり、会場に来ていただけずプログラムには記載していませんでしたが、中村先生のご厚意により、急遽特別企画として、WEBでご講演いただきました。ご自身がプログラムディレクターを務められている内閣府AIホスピタルプロジェクトの概要、活動内容をご紹介され、「医療にAIを用いて、診療記録の負担、現場のミスが減れば、スタッフのストレスも減少し、時間の余裕が心のゆとりが生まれる。ひいてはそれが、患者のストレスも軽減し、目と目があつた診察は満足度を高め、思いやりのある医療現場を取り戻すことができる。そのためにこそAI技術が必要だと私は考えている」と話されました。

特別講演1では、自治医科大学学長の永井良三先生に「情報化時代の医療マネジメント」と題し、国の革新的研究開発推進プログラム(ImPACT)のヘルスセキュリティプロジェクトのプログラムリーダーとして取り組まれた心関連疾患リスクシュミレーター開発サブプロジェクトのご講演をいただきました。日本の医療提供体制の中での医療マネジメントの実践例と研究を解説され、「日本人は長い間、法則性で物事を片付けよ

うと考えてきた傾向があり、学術においてもそうである。人間の営みの部分に学術の光を当ててこなかった。しかし、ビッグデータ時代には、それが求められる。意味を理解し、背景を理解して原因を探ることが必要になる。そうした意味では学術が変わるよい機会になるのではないかとまとめられました。

特別講演2では地方独立行政法人堺市立病院機構理事長/一般社団法人日本医学会連合会長/日本医学会会長の門田守人先生に、「医学・医療の向かう道」として医学会はアカデミアとして社会的責務を果たすべきであるという見地にたつて、これからの日本における医学・医療の向かうべき方向性についてご講演いただきました。「社会が混沌としていけばこそ、学術団体が正しい方向性を社会に示すことが求められる。」と話され、医学会の変革に取り組んでこられた門田先生の熱意が伝わる講演でした。

特別講演3では、国立病院機構理事長 楠岡英雄先生に「国立病院機構における臨床評価指標(Clinical Indicator:CI)とその活用」の講演をいただきました。平成22年度に全病院から毎月のレセプトデータおよびDPCデータを一元的に収集・分析する診療情報データベースを構築し、厚労省の「医療の質の評価・公表等推進事業」に採択され、「CIの計測を行うだけでなく、その結果を用いて改善活動を行って、はじめて良質な医療の提供が実現できる」との考えから、「CIを用いたPDCAサイクルに基づく医療の質の改善事業」の展開を強調されました。

招待講演1では、東京オリンピック・パラリンピックの開催にともなうプロスポーツ界の環境変化などを株式会社ヘルステック研究所代表取締役/大阪エヴェッサGMの阿部達也先生にご講演いただきました。プロバスケットボールチームのGMとして、選手個人の健康データを把握、データ化しており、それを一般市民が自分自身の記録として健康増進や健康管理に活かしていくPHR(Personal Health Record)を利活用できる社会を目指し、その現状と展望についてご紹介いただきました。

教育講演1では現在の社会・医療が抱える様々な問題を多角的な視点から学んでいただこうということで、滋賀大学データサイエンス学の竹村彰通先生に、「健康医療のためのデータサイエンス-滋賀県長寿の要因分析を例として」をご講演いただきました。竹村先生は、滋賀大学で2017年に日本初のデータサイエンス学部を開



会場風景